
召喚師キャロ

猫谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚師キャロ

【Nコード】

N5434S

【作者名】

猫谷

【あらすじ】

事故・謝罪・転生。テンプレな三段活用から始まる物語。一部設定やキャラを流用します。召喚されるエルフとか！

始まり始まり（前書き）

よろしくお願いします。転生ものです。TSものでも有りますが、そこら辺はあまり気にしないでください。召喚される生き物が、グリムグリモアのものから変更される場合が有ります。こちらにも気にしないで頂けると幸いです。

書いている人間のハートはガラス製です。容易く碎けます。苦言・忠告・誹謗中傷はプチプチに包んで下さると感謝です。感想・意見がもらえると、とてもうれしく思います。

一話はとても短いです。

では、これで失礼させて頂きます。

始まり始まり

転生しました。

テンプレ的にトラックに轢かれて轢死。
ひげもつさりの神様に出会って、すまぬ、間違いじゃった、転生
させてあげようの三段活用。

そんなこんなであつさり転生。

「お詫びに後から何か役に立つ物を送ってやろう
それと隠蔽の為に主の存在は無かった事にしたので
まあ、達者でな」

そんな言葉と共に足下に開いた穴に落下。

そして今、オギヤーと産まれました。

「頑張ったな、キャロル」

頭上からおそらく父親と思われる男性の声が響く。

「ええ、貴方
見てください
可愛い女の子ですよ」

俺を抱えている母親と思われる女性の声も響く。

どうやらTSのよう。

「お前の名前はキャロだぞ〜
元気に育ってくれよ〜」

めっさ機嫌の良い父親の声が、遠くなる意識の中で頭の中に響く。

どうやら脳のブレーカーが落ちるようで。

だんだんと意識が薄れていく。

まぶたが落ちていく。

でも、せめてもう一度だけ、この瞳に両親の顔を焼き付けておこ
う。

目覚めた時にすぐに親だと分かるように。

俺を産んでくれた親に感謝するために。

俺の新しい親のために。

覚えておきましょう。

お礼を言うために。

だから今は俺を抱える母の慈愛に溢れた腕の中で眠ろう。

お休みなさい。

母さん。

父さん。

お休みなさい。

第一話

早速だが、少々暗い話をさせてもらう。

原作に於いてキャラ・ル・ルシエは幼い身空で、産まれた村を一人追放されていた。

この時、疑問に思わなかっただろうか？

幾ら強力な竜種の制御に失敗したからといって、たった一人で村の外へ放り出すなど、親が認めるのかと。

それでなくとも親は娘と共に村を出るのが親としての”当たり前”ではないか、と。

原作においてキャラの両親が亡くなっているとの描写はない。

だが、もしキャラが村だけでなく、親からも棄てられていたなら、あそこまで歪み無く育つものなのだろうか。

また、魔法少女という物語において、村からも親からも棄てられるというような救いのない話は許されるのだろうか。

それならば、親が居なかった、すでに亡くなっていたからこそ、

誰にも庇われる事なく、一人追放される事になった。

そう考えるのが自然なものではないのだろうか。

今更気付いたところで手遅れなのだけど、せめてもう少し早く気付いていれば、この悲劇は防げた筈だったのだ。

「ん、んあ。んー朝だー」

んー、と握った両手を開いて手を頭上に上げて、伸びをする。

朝の冷えた空気が温い布団から抜け出た体を刺激する。

光を遮るカーテンの隙間から漏れ出るように射し込む陽の光が眩しい。

窓からはチュンチュンと朝を告げる鳥の声。

バサバサと忙しく飛び回る鳥の羽音が一日の始まりを教えてくれる。

鼻をくすぐるのは、作り掛けの朝食の匂い。
コトコト、タンタンと調理の音が心地よい。

村に広がるざわめきは朝の始まりの音。

ぼんやりとした意識が覚醒する。

「キャロー、ご飯よー、はやく起きなさい」

「はーい。いま、いくー」

階下から響く母さんの声に呼ばれて、伸ばした体を戻してベッドから飛び降りた。

「キヤロ。今日はお母さんもお父さんも狩りに出掛けるから、お留守番お願いね」

今日は父さんと母さんが狩りに出掛ける日だ。

此処、世界の名を【アルザス】には幾多の強力な竜種や、それと渡り合うだけの力を持つ野生動物。

それらの獲物となるような多くの草食動物が数多く存在している。

「ん。分かった」

父さんも母さんもルシエの村有数の高位魔導士として、狩り人の職に就いている。

何でも二人の恋の始まりは、野生の竜との戦闘でピンチに陥った母さんを、父さんが命懸けで助けた事だったとか。

「エリンお姉ちゃんが来てくれるから、仲良くね」

「まかせて。面倒見るから」

エリンお姉ちゃん。

子どもっぽい性格の近所のお姉さんだ。

今年10歳になる。

本当に子どものような性格で、好奇心の赴くままに行動する困った人である。

最近では立場が逆転していて、本来ならエリンが俺、現4歳児の面倒を見る筈だったのだが、逆に俺が面倒を見ている。

最近は、如何にも妹って感じがしてならない。

「陽が落ちる前に帰ってくるからね」

「ん。待ってる」

狩りは陽が出ている間だけ、夜は、目に頼らずとも狩りの行える獣の時間。

危険が増す為、日没前に成果が有っても無くても、狩りは終わりになる。

「それと、外で遊ぶ時には暗くなる前に帰ってくるのよ」

「もう耳にタコが出来るくらい聞いてるよー」

これら一連の台詞を毎度毎度、狩りの度に言っていくのである。しかも最初は今の2倍は有った。

「きちんと、うがい、手洗いはするのよ」

「分かってるよ。母さんは心配性なんだから」

そう、この母さんは実に心配性だ。

「えっと、後は怪我しちゃ駄目よ？」

「大丈夫。大丈夫。怪我はしないように遊ぶから」

「えっと、えっと、後はね…」

「母さん。もうそのくらいにしておいたらどうだ？」

椅子に座って眺めていた父さんが苦笑混じりに、母さんを止めてくれた。

止めなかったら何時までも延々と続くから、父さんか俺、どちらかが途中で止めるのが常である。

「んまつ！？ 貴方ったら、キャロが心配じゃないの!？」

食って掛かる母さん。

これも何時ものやり取り。

「いやいや、心配はしてるよ。でもそこまで言わなくても良いだろうっ？」

キヤロだつて毎日毎日同じ様な事を聞かされているんだ。
そう何度も同じことばかり聞かされているは大変だろう。なあ、
キヤロ？」

父さんの問い掛けに答えようとする俺を、『そうなの？』と瞳に
涙をうつすらと浮かべて、母さんが目で否定して欲しいと訴えてく
る。

「ごめん、父さん。

俺は母さんを選ぶよ。

母さんの笑顔の為に犠牲になってくれ。

「そんな事ないよ」

その言葉を聞いたら、母さんの瞳は輝きを増して、満面の笑顔。

「そうよね。そうよね」と幻聴が聞こえてきそう。

父さんからは『裏切ったな！』なんて言葉が、あー、あー、きこ
えない。

まあ、あれもこれも母さんの愛情表現の一つだから、実際の所、
愛されてるって実感出来て嬉しいんだけどね。

父さんと母さんが狩人の仲間と共に狩りに出掛けて、少し経った
頃、エリン姉さんが家に来た。

らうじ

一所にじつとしていられないエリンに連れられて、近所の子たちと合流。

日が暮れるまで、村中を駆け巡って遊んだ。

精神年齢はすでに30を越えているけど、童心に返ってはしゃぐのも中々に楽しいものだ。

帰り道、急に村が慌ただしくなった気がした。

村の中がざわざわと騒がしい。

普段は、ここまで騒がしくなかった。

夕暮れのこの時間。

狩りを終えた狩人を出迎える為、確かに普段から多少騒がしくなる。

けれど、それもここまで騒がしくなった事は記憶にない。

何かが起きている。

そんな確信が有った。

取り敢えず、子どもらを家に帰らせ、一人になる。

その際、寄り道せずに直ぐに家に帰るよう、しっかりと言い含めておく。

子どもらも村に漂う嫌な空気を感じているのだろう。

口答えせず、各々自身の家に向かってくれた。

この不安が杞憂に終わって、何事も無ければ良いのだけど。

事情を知るため、村の中央に建てられた長の家を目指す。

無論、道中聞き耳を敬てるのは忘れない。

断片的な情報しか得られなくても、何の情報も無いよりは良い。

父さんが、母さんが、狩りに出ていた人達の行方が分からなくな
った。

助けを求めに、里へ駆けてきた狩り人の話では、里への帰還中に、
里へ向かう赤竜の群れを発見、その場で食い止める為に抗戦状態に
入ったとの事。

状況は極めて不利で、全滅の可能性も有るため、援軍を要請する
為に、里へ一人が向かい。

残りの狩り人は、その場で赤竜の群れを塞ぎ止めているとの事。

原作に於いてキャラは当初竜を恐れていた。

それは何故だろうか。

力の制御が出来ずに暴れさせてしまったから？

それによって村を追放される事になったから？

それとも竜によって大切な人”父母”を喪ったから？

まあ、それを俺が知る事はない。

だから、そのどれか、もしくはその全て、または俺が思い付かな
いような深い理由が有るのかも知れない。

しかし、それは結局の所どうでも良い事だろう。

それはキャロの事情で有って俺の事情では無いのだから。

大切なのはキャロの両親、詰まる所の俺の両親がキャロが追放される前、俺が追放される前に命を喪つかもしれない事が有るということだ。

状況は極めて悪い。

すでに父さんや母さんたちの行方が分からなくなって三日。生存率は絶望的だ。

この身がたったの四歳で有ることが恨めしい。

この体では平地に立てられた村を駆け巡れても、複雑な地形の森を駆ける事は出来ない。

今のまま入っても、餌となるのが目に見えている。

せめて六歳、いや五歳にでもなっていれば、村を出て、竜や獣の蔓延る森に飛び出し、両親を捜しに行くことも出来たで有るうに。

ああ。

俺を転生させた神様。

もしこうなる事を知っていたなら、俺はお前を恨むぞ。

それから三日経った。

不安に押し潰されそうな日々、不甲斐ない自分に対する怒り、何かしなければならぬという焦燥感に駆られ、眠れない夜が続く。俺には一体何が出来るのだろうか。

夜が明ける頃、村に報が入った。

狩人たちを見つけたという報告だった。

場所は村から10キロ離れた山の中。

そこで変わり果てた姿の皆が見つかった。

近くには赤竜の群れの死体と一匹の獣の死体。

狩人たちは竜を村から離す為に囷となって、森の中へ引き込んだ。

そしてそこで運悪く、森の奥地に棲む獣【森の主】ムティカバに襲われた。

ムティカバは鋼よりも硬い体毛に覆われた最大で体長10メートルにも成長する虎の形をした獣だ。

魔法に対する耐性も非常に高く、竜と並んでこの世界の生態系のトップに存在している。

戦いは更に激化した。

狩人たちは使役する竜と共に戦って戦って戦って、赤竜の群れとムティカバを、命を代償に相討った。

それが事の顛末だった。

キャラ紹介（前書き）

度々、内容が変更されるかも、です。

キャラ紹介

名前：キャロ・ル・ルシエ

出身：第6管理世界アルザス地方（管理世界とされる前の世界名をアルザス。管理世界で有る事を快く思っていない者、その名で呼ぶのが嫌な者など、ほとんどの人が第6管理世界ではなく『アルザス』と呼んでいる。）

中の人：地球に生きていた男。憑依ではなく転生で有る。原作知識をうる覚えながら持っている。

魔力量：原作キャロと同等。

能力（神から与えられたチート）：

1 『魔道書『グリムグリモア』。PS2規格のゲーム、『グリムグリモア』に出てくる魔道書で有る。ゲーム内では十数冊と数が多いが、ここでは一冊に纏められている。

2 『魔力の自然回復量UP。魔力を使い果たしても、他人より遥かに早く回復する。余程の事が無い限り魔力を消費する速度より、回復する速度の方が速い。基本尽きる事はないが、魔力が尽きないだけで、最大出力は低い。

以下【召喚存在】

名前：エレン

出身：何処かに在るかも知れない妖精の国。

魔力量：膨大。

修めている武術：棒術、弓術、銃術。

役職：戦士長。森の戦士1000のトップに立つ戦士長で在る。

第二話

——俺が仇を討つ。

二メートルほどの距離を挟んで、二人の女性が得物を向け合い相対している。

片や日の光を浴びてキラキラと輝く金の髪が美しい、見事な肢体の大人の女性。

片やピンクの髪が目眩しい八歳ほどの少女。
二人共に、手に持つ得物は、棒状の獲物。

先手は、少女が仕掛けた。

一手目は突き。

突いて、払って、薙ぎつて、叩く、高速の連続攻撃。

女性はその流れるような一連の攻撃を的確に丁寧に全てを受け流す。

少女は焦りを見せる。

手応えのない攻撃。

まるで水を相手にしているかのような、錯覚。

一連の攻防ではつきりと分かる技量の差。

相手は自分より遥かな高みにいる。

その差は時を経る毎に明らかに、追い詰められていく。

手の内を見せれば見せるほど動きを見切られていく。あまり時間は掛けられない。

勝利を願うなら、短期決戦しかない。

少女はそう思った。

少女は心を決めて、残った体力を全て使い切る覚悟を持って、全力の攻勢を掛けた。

相手よりずっと小さな体を生かした薙ぎ払いで足元を狙う。

「はあっ！」

容易く受け流される。

流れに身を任せるように、勢いのままに突く。
弾かれる。

突く、突く、突く、突く、突く、突く、突く。
女性もそれに合わせて、突き返す。
不規則に迫る突きを、突き返す。

一体それはどれ程の技量で出来る妙技か。
少女には判断できない。

技量の差は明らか。

けれど少女には諦められない理由があった。

これまでの修練の全てを出し切るかのように全技量を持って、あらゆる攻勢を仕掛けた。

そして限界はやって来る。

「そこっ！」

全力の攻勢に体力を切らした少女の一瞬の隙を突いて、女性の得物がその牙を剥く。

女性の振るった棒が霞む。

少女の意識の隙間を突くような妙技。

意識の隙間を絶妙に突く一撃は、少女の脚を払い、体を宙に打ち上げる。

少女の視界が反転する。

上下逆さまになって、脚を払われた事をようやく理解した少女の口から、

「っ!？」

声にならない悲鳴が上がった。

それは脚を掬われた自身の不甲斐なさに対する思いか、それともこれから来る痛みに対する怯えか。

自覚する暇も無く、次の衝撃はやって来た。

脚を掬い、宙に浮かせ、不可避の状態を作り上げてからのフィニッシュ。

大上段に振り上げた棒による叩き付け。

大上段から降り下ろす力と、重力という大地に引かれる力、今にも放たれようとする弓の弦の様に引き絞られた身体のパネを生かした大威力の一撃。

予備動作も使用後の隙も大きい攻撃。

されど、その代償に見合っただけの威力を誇る締めの一撃。

少女は降り下ろされた棒を防ぐ為に、その棒と自身の間に棒を構え、防御の姿勢を取る。

不安定な空中で、崩れた体制で、反射的に取った防御の姿勢はやはり万全とはいかず。

そして、金の髪をした女性の振るった棒は、防御をものともせず、上から叩き潰すようにして押し通り、その小さな体を地面へ叩き付けた。

「げひゃっ」

頭から地面に突き刺さるように、叩き付けられた少女を中心に、小さなクレーターが出来た。

それでも、死なないのが非殺傷設定。
大変便利なものである。

キャラはマンガチックにぷくつと膨れ上がった頭部に、濡れたタオルを当てて、患部を冷やしていた。

「大丈夫ですか、主？」

そしてその横には、キヤロを心配気に見詰める一人の女性がいた。つい先程まで、キヤロと戦っていた女性だ。

夕焼けに照らされ光輝く稲穂の様な金の髪。

鍛え上げられた猫科の獣の様なしなやかな肢体。

その身を包むのは、深みの有る赤の帽子と基本の色を緑に所々赤が使われた軍服。

胸当て、籠手、具足に腰回りと、合計四カ所を守る様に装備した緑色の鎧。

耳は通常の人間より、明らかに長く、それが彼女の種族を主張しているかも知れない。

背中から生える二対の、透き通った碧の羽。

そんなフェアリーと呼ばれる種族で、ボンキュッボンなお姉さんがそこには居た。

戦いは更に激化した。

狩人たちは使役する竜と共に戦って戦って戦って、赤竜の群れとムティカパを、命を代償に相討った。

それが事の顛末だった。

父さんと母さん、狩り人たちが亡くなってしまった後、まあなんとかやって来た。

二度の人生、合わせて初めての事で、ショックは大きかったと思う。

自身の肉親を失うのは、初めての経験だった。

正直な話、当時の事はほとんど覚えていない。

父さんと母さんの残った遺体を見て（遺体は損傷が激しく五体満足な遺体は存在していなかった）、気がフツと遠くなって、そのままぼうつとしていて、気付いたら葬儀が終わっていて、家族の居ない家の中に一人で居た。

静かな家だった。

確かに存在していた温もりを失った家は冷たくて、もう会えないのだという事を理解して、自分は独りなのだと理解した。

そして二度目の人生で初めて心から泣いた。

声をわんわんと上げて、枯れるまで泣いた。

んで、それから4年。

両親が亡くなって、何とか持ち直して、日々を生きています。

落ち込み、復活して、そんなある日、神から一冊の本が届いた。

それは古めかしい装丁の為された一冊の本で、表題を【グリムグリモア M g R i M o i R e】。

俺以外の誰にも読めない文字で書かれていた。

実際にエリンやその親、長に近所の子らと試してみたから、間違いない。

【精霊魔法】 【交霊術】 【黒魔術】 【錬金術】 の四つの術が記され

た一冊の魔術書だった。

この本はP S 2用規格のゲーム『グリムグリモア』に出てきた魔導書だ。

実際のゲームでは何十冊もの本に別れて記されていたが、神様仕様のこれはそれが一つに纏まっている様。

出来る事は異なる世界の存在を召喚し、使役する事。

無論、友好的な関係が気づけなければ拒否される事もある。

ゲーム内では拒否される事は無かったが、此処は現実。

召喚できても気に食わなければ戦わない、なんて事もあるだろう。

表紙を開くと、一枚の手紙が挟まれているのに気づいた。

『約束の物じゃ。お主、本好きじゃろ。これでお主もチートじゃ。ちと弱いかも知れんがの』

そんな神からの手紙だった。

「確かに本は好きだけど、好きなのはマンガや小説で、こんな学術書のような本ではないよ」

厚さにして10センチ。

今だ少女のこの身には、不便な代物だった。

因みに学術書云々は想像の産物だ。

実際に見たことはないから、たぶんそんなものだろうという想像

に過ぎない。

「はあ。どうしようか、これ」

んで、何だかんだで、読んで今は召喚した【フェアリー】の戦闘教官に訓練を付けてもらってる。

他にも現在召喚できる存在は数体いるので、後々機会があれば紹介したいと思う。

だから今はこの危機をどうにかして抜け出さなければ、ならない。

「それで、主。何か弁明は？」

俺の前で額にピキピキと青筋を浮かべて、仁王立ちしているのはエレン。

精霊魔法で召喚したフェアリーの女性で、俺の師匠^{せんせい}。

女教師って良いよね。

萌える！

「聞いているのですか、主！ どうしてこんな事をしたのですか！
？ 答えて下さい！主！」

悲愴なまでの決意と思いを込めて、その蒼の瞳に涙を浮かべて、エレンは俺に訴える。

何で、何でこんな事をしたのですか、と。

「…」

俺は沈黙を保つ。

エレンの問いに答える言葉を俺は持っていなかったから。言葉を発せずに、ただ正座で沙汰が下されるのを待つしかなかった。

エレンは俺に何を言って欲しかったのだろうか。

俺が沈黙を続ける度に、その美しい顔は悲しみに溢れ、瞳には涙が溜まっていく。

否定して欲しかったのだろうか。

だが俺は弁明する事は出来ない。

否定する事は出来ない。

事実なのだから。

「分かりました。主はやってしまわれたのですね。耐えられなかったですね」

悲しみを携え、震える声でエレンは俺に確認する。

あの誘惑に耐えられなかったのですね、と。

俺は頷く。

そう、俺は負けたのだ。

耐えられなかった。

耐えられなかったのだ。

そう――

「何で私のプリンを食べてしまったのですか！？ 答えて下さい！
主！」

「……っすまない」

―― エレンのプリンを食べてしまったのだ。

「ならば、このプリンは私が貰います！」

エレンが俺の秘蔵のプリンを懐から取り出し、宙に掲げる。

「そ、それは俺の秘蔵のプリン！？ 何故お前が持つてる！？」

秘蔵のプリン。
前世に今世。

合わせて22年の研鑽の果てに得た技術。

地球には存在しない様々な材料を使つて創つた至高の一品。

契約を結ぶ為に使えば一発で契約できる最高の一品。

デビチルで例えるなら、ラスボス以外のあらゆる悪魔を一口で魅了し、無条件で契約できるような至福の一品。

家の地下室の隠し倉庫の床下の隠し扉の先の金庫に隠しておいたプリンが何故ここに！？

「ふっふっふ。私に隠し事が出来とは思わない事です。私は主の全てを把握しているのです！ フェアリー戦士団1000人のトップに立つ戦士長を甘くみないでもらいたい！」

ドドンという効果音が何処からか響き、エレンの姿を大きく見せる。

「つくそ！返せ！」

「あははは。駄目です。我がプリンの仇、討らせて”いただきます”」

言うが否や、もの凄い勢いで食べ出すエレン。
キヤロには止める事が出来なかった。

「ああああー！」

出来たのは、orsの体勢になって、涙を堪える事だけだった。

「…おいしい」

その一言が聞いたことが、唯一キャロの救いだった。
その後、エレンにプリンの仇と挑んで、冒頭のシーンに繋がるのである。

「大丈夫ですか？ 主」

小さなクレーターに頭を埋めたキャロに、エレンが心配気に声を掛ける。

非殺傷設定の効果で死ぬ事はないと分かっている、見た目は首から地面に埋まった変則系犬神家。

非殺傷設定でなければ確実に死んでいたであろう一撃だった。

「ううう。プリンのかあたあきいい」

埋まった頭から、地の底から響くような怨嗟の音が響く。
ちよっと涙声なのが、微笑ましいかも知れない。

第三話

「主には攻撃の才能がありませんね」

「もうちょっとオブジェクトに包んで言って欲しかった」

そんな話。

「ふっ！」

短い呼気と共に突き出される棒の形を取ったデバイス。

「甘いつ！」

渾身の力を込めて、放った突きは容易く弾かれ、カウンターで突き返される。

「っぐう」

膝を付くキャロ。

その様子を見て、エレンが構えを解く。

模擬戦闘の終わりだった。

「痛たたた」

突かれた部位が酷く痛む。

患部を押さえた右手から、淡い桃色の光が漏れる。

村でも日常的に使われている、特に名前のない回復魔法だ。

「前々から薄々感づいてはいた事ですが、主には才能が有りませんね。10年努力しても二流の使い手止まりでしょう」

アレインから、そんな事を言われた。

「あー、やっぱり？」

そうだよなー、と思った。

俺だって馬鹿ではないのだ。

ハンデを貰っても一撃も入れられない時点で気付いていたさ。才能ないんだろうな、って。

「気付いていたのですか？」

「そりゃ、あれだけ完封なきまでにやられればね」

既に二年も訓練を付けて貰っているのだ。

エレンは馬鹿みたいに強いが、ハンデを付けて戦っていた。

それこそ、俺ですら勝てるんじゃないかと、思ってしまうほどに弱体化させていた。

それでも、俺には一撃も入れられないのだ。

「ふむ。では、主。今後はどうしますか？ このまま、訓練を続けますか？」

これは重要な選択なのだろう。

今後の戦闘スタイルに関わる大事な話。

今後、原作に関わっていく以上、大事な選択になるに違いない事だった。

俺には考えがあった。

俺の出来ることで、最も強力な事は「グリムグリモア」を利用した召喚魔法。

そして、原作キャラの本来の戦闘スタイルは、後方で仲間の強化、回復、補助を担当する後方支援^{フルバック}。

そこから推測する俺の理想的なスタイルは、召喚存在に前衛を任せ、後方での支援に専念する事。

つまり、一人で戦える後方支援^{フルバック}だ。

本来一人での戦闘が不得手で、仲間と共に戦う事でその力を発揮する後方支援だが、召喚した存在に前衛を任せられるなら、話は別。

俺のやるべき事は最後まで戦場に立って仲間のサポートをし続ける事だろう。

「ああ。才能が無い以上、すっぱり諦めようと思う」

そう言つと、エレンは今にも泣き出しそうな顔になった。

「で、では私はお役御免という事ですか？」

不安げに瞳が揺れていた。

「い、いやいや。違う。違う。言い方が悪かった。訓練自体は止めない。ただ、ちょっと内容を変えるだけだ」

慌てて、説明。

「っほ。そうですか。それは、良かったです」

安心したように笑みを見せるエレン。

つつい此方も笑みを誘われてしまうような笑顔だった。

「ふむ。ではどのような内容にするのですか？」

「防御や避ける事、ひたすら継戦時間を伸ばすような訓練で頼む」

そう言つと、エレンは怪訝そうな顔をした。

「攻撃の訓練は良いのですか？」

「そつちは、召喚した存在に任せるよ。エレンも居る事だし。俺の仕事は強化や回復、補助に絞る。だから、前衛の足手まといにならないように、自分の身は自分で護れるくらいの力が欲しい。時間稼げば助けてくれるだろうし。他人任せな戦い方になるけど、それが一番良いやり方だと思う」

「そうですか。なら、私も更に全力で主を鍛えましょう。目標は私相手に身体強化魔法を使わずに、10分生き残る事でどうでしょう？」

「いや、それは無理。何その鬼畜ゲー」

「大丈夫です。主なら！」

なんとという根拠のない信頼。
けど、悪い気はしない。

むしろ体の奥から力が湧いてくるような、不思議な感じだ。

「じゃ、頼む。非殺傷設定のお蔭で死にはしないから、本気でな！」

右手の人指し指に着けた指環状態のデバイスが、姿を変え、俺の手に収まる。

因みに、このデバイスは父の形見だ。

父は竜との契約こそ出来なかったけど、その鍛えぬいた肉体と身体強化魔法で、前衛を務める戦士であった。

母は竜と契約した巫女。

俺はこの人の才能を受け継いだのだと思う。

「それが貴方『主』の望みであるのなら！」

エレンも棒を構える。

俺が召喚した存在は、どういう扱いなのか分からないが、何故か俺の判断で非殺傷設定とする事が出来る。

それこそ、エレンが相手の頭を砕くような攻撃をしても、威力が落ちて昏倒レベルになる。

瞬間、エレンの姿が視界から消え、俺の体がトラックに轢かれたかのような衝撃と共に宙を舞った。

少し早まったのかもしれない。

「主
い
い
い
—
—
—
!
!
!」

エレンの絶叫が、青空の下、響き渡った。

第四話

「村を出ようかと思う」

「本気ですか!？」

そんな話。

地平線の果てに天を突くような大山脈が見える開けた不毛の大地。所々に小さなクレーターが有る。

その一角に一人の少女が仰向けに倒れ込んでいた。

「ぜえぜえ……」

照りつける太陽。

滝のように流れる汗が肌を伝って不快感。

吹き付ける暑い風は汗を飛ばす所か、汗を増やすだけ。

断続的に吐き出される荒れた息。

体の疲れはすでに限界で、呼吸は荒れ、仰向けに大地に転がる体を起こす力はない。

「さあ、主！ 立ってください！ まだ限界には程遠いですよ！」

修行と言う名を借りた私刑の時間だった。

いや、エレンは真面目に修行を付けているだけなのだが、その修行はとてもハードだった。

「休憩時間は終わりです！ さあ、始めますよ！」

仰向けに転がった頭を動かし見れば、武器を振り上げ迫るエレン。武器の軌道を辿れば、そこに有るのは俺の腹。

やけにスローに見えるが避ける術はない。

必然、悶絶するような威力を通り過ぎて痛すぎる一撃を貰った俺の都合の良い頭は痛みを味わう事を拒絶し、痛みを味わう前にブレーカーを落とし、気絶した。

「主っ！？ 主iiiiii！」

「主。目覚めましたか？」

視界に広がるのは、俺を頭上から見下ろすエレインの顔。頭の下に感じる柔らかい感触。

膝枕。

額に感じる冷たい布の感触。

ああ、気絶しといて良かった。

役得である。

「おはよう、エレイン。どれくらい気絶してた？」

「10分ほど・・・ですね」

「そっか・・・」

膝枕は名残惜しいが、意を決して立ち上がる。立ち上がる。

……………無理だ。

前世ではトンと縁の無かった膝枕。

この至福の時間を終わらせるなど勿体無い。立ち上がるのは無理だ。

嫌だ。

絶対嫌だ。

「主？」

立ち上がらない俺に疑問を持ったのか、エレインが首を傾げる。
起きたのだから、立てという事か。

だが、断わるっ！

俺はまだこの至福の時間を終わらせたくないのだ。
せめて、あと5分。

太ももの感触を体と頭に刻みつける時間を稼がねば。

「なあ…エレイン。俺は…強くなれているのかな？」

「主？」

「不安なんだ。…強くなっている実感が無い事が。自分が弱い
ままだという事が。何時も何時も思ってしまう。このままで良いの
か…。こんな弱い俺に誰かを守る事は出来るのか…。もう大切な人
を失う事はないのかって…」

瞳に涙を浮かべ、手で顔を覆う。

無論、嘘泣きだ。

そんな難しい事を俺が考える訳ないだろう。

チラと指と指の隙間から、エレインを覗き見る。

「主…」

複雑そうな顔で、何かを考えている。
どうやら時間稼ぎは成功したよう。

後は何だかんだと理由を付けて、ダラダラ喋っていれば、5分は持つだろう。

計画は成功だ！

「主…嘘をつかないで下さい」

その時、見たのはエレンの清々しい笑顔。

「グヘッ」

後頭部に感じる柔らかい感触は姿を消して、頭に感じるのは堅い大地の感触。

理想郷はその姿を消した。

「何で…」

何故、気づかれた。

俺の芝居は完璧だった筈。

エレンに気づかれるようなミスは犯していない…筈だ。

俺の嘘泣きは、前世で不良のカツアゲを度々撃退して来た、真に迫ったものだというのに。

情けなくみつともなくマジ泣きすれば、不良のなけなしの良心ですら動かせた業わざだったというのに。

「何で分かったのか、ですか…」

エレンが呆れたような顔で、大地に仰向けに倒れ伏す俺に言った。

「ノリで生きてる主がそんな難しい事を、考えている訳がないじゃないですか」

普段の行いが悪かったのか！
ガッデム！

「さ、立って下さい、主。」

手を差し伸べられる。

「今日の訓練は10倍増ですよ」

軟らかい笑顔で紡ぎ出されたのは、処刑宣告。

「……………え？」

差し伸べられたその手は、俺を地獄に誘う死神の手だった。

「さ……………行きますよっと」

頭が言葉の意味を理解して、理解したくなくて、一瞬止まる。

呆けている間に手を掴まれ、引っ張り上げられる。

俺の未だ小さな体は容易く宙を舞い、エレンの小脇に抱えられた。

エレンは俺を抱えて羽を震わせ、宙に浮く。

進む先は、このアルザスで最も強力な竜種が群れを作って蔓延る山。

アルザス山脈。

危険過ぎて誰も近づかない。

アルザスの中心に存在する大山脈。

そんな危険度がMAXな場所に向かって、エレンは突き進む。
俺を抱えて。

「…何処に向かっているのでしょうか？」

体中の汗が急激に冷えて、体が悪寒に震える。

ついさっきまで、あんなに暑かったのに、今は体の震えが止まらない。

「アルザス山脈ですよ」

エレンの口から出る無慈悲な宣告。

「何故？」

「無論、修行の為……ですよ」

ああ、膝枕なんて誘惑に乗らなければ良かった。

……いや、膝枕に罪は無いか。

有ったとすれば、嘘についてまで堪能しようとした俺が。
だが、不思議と後悔はない。

「今日は寝かせませんよ」

夜通しの修行だと言う事ですね。

間違えた。

苦行ですね。

生きて明日の朝日が拝めれば、良いなあ。

無理かなあ。

火竜の殺息。^{プレス}

翼竜の羽ばたき。

地竜の顎。^{アギト}

どれもこれも一人の命を奪うのに充分すぎる程の殺傷力を持っている。

そんな代物をぶちかます蜥蜴共に俺は追われていた。

「助けてエレン！ マジで助けて！」

命を掛けた鬼ごっこ。

捕まったら美味しく食べられます。

この幼女ボディはぷにぷにで、さぞ美味しい事でしょう。

「助けてー！」

上空で気配を殺し竜から隠れて見守るエレンに助けを求める。

「主ならきつと大丈夫ですよー」

今は、その根拠の無い信頼が辛い。

「マジ無理ー！．．．今、かすった！．．．かすったぞ！」

次々と入れ替わり、波状攻撃を仕掛けてくる蜥蜴共。

一撃、一撃が致死の威力。

追われる恐怖が半端ない。

今はブースト掛けて身体強化しているから、辛くも逃げられているが、魔力が尽きたらパクっといかれる事だろう。

神から与えられた力で尽きる事はないのだが、不安は不安で、とても怖い。

それまでに、どうにかする方法を考えねば。

取り敢えず、

「舐めんな、蜥蜴ヤロー！」

指環状態のデバイス【カドウケウス】を起動し、棒状へと姿を変えたそれで殴り掛かってみた。

「あ!？」

取られた! 糞蜥蜴に取られた!

「エーレーン! 武器、取られたー!」

助けてー!

「大丈夫です! 主なら!」

「もう無理だよー!」

ひゃあああ!

また、かすった!

「朝日が拝めたら、膝枕してあげますよー」

.....

「マジで！」

めっちゃヤル気だ。

夜明けの光に照らし出された世界の中で、大空に浮かぶ星を掴むかのように伸ばされた腕。

「俺の勝ちiiiiiiiー！」

やり遂げた顔で落ちるように眠りに付く主。

キャロ・ル・ルシエ様。

まさか、本当に夜明けまで竜の攻撃を避け続けるとは、流石は主です。

気絶する前の主の実力を考えれば、複数の竜の攻撃を13時間に渡って捌き続けるなど、無理だと判断していたのですけれど、まさか本当にやり遂げるとは、流石は主です。

この10時間で更に回避・防御に磨きが掛かりました。

最後の方では、消耗した体力を使わない為に薄皮一枚で避け続けていましたからね。

そして、即座に回復。

竜の攻撃を利用し同士討ちさせる判断力、最大出力は低いけれど回復量の凄まじい魔力、手を変え、品を変え、結局最後まで致命傷を喰らう事なく耐え切った我が主。

追い詰めれば追い詰める程に成長する我が主。

そこまでして報酬の膝枕が欲しかったのでしょうか？

嬉しかったのでしょうか？

主から頼まれれば、幾らでもしてあげるというのに。

・・・そうですね。

目が覚める前に、今の内からしてあげましょうか。

「村を出ようかと思う」

「本気ですか!？」

そんな話。

【次回に繰越します】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5434s/>

召喚師キャロ

2011年10月7日09時35分発行